

## R2.9.4 アドバイザリーボード委員からの主な意見

議 題	委員名	意 見
○ これからの時代における乳幼児教育・保育のあり方	朝倉委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ このような時だからこそ、乳幼児期の教育・保育における体験や関わりの重要性を、広く社会に訴え続けなければいけないのではないか。</li> <li>・ 活動や行事について、毎年行うべきかどうかや、事業の意味、価値、本質を見直して、その質を高めていくということが非常に大事ではないか。</li> <li>・ オンラインやリモートの有効性や限界を理解し、リアルな体験の重要性や留意点を理解しておくことが必要になる。</li> <li>・ センターには、質の高い体験のための事例研究や園・所等への発信、子供の権利を基礎とした事例研究や社会の高まりに向けた積極的な広報が求められる。</li> <li>・ 来年4月に小学校に入学する子供たちは、例年とはずいぶん違う状況にあるはずなので、そのことを理解して、円滑な連携・接続となるために、今からできることはしておかなければならない。</li> </ul>
	今井委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 新型コロナウイルス禍においては、いろいろなことが遠隔で、オンラインでされることが多くなる。Wi-Fi 等のデジタル環境がなくて取り残されるような家庭や子供たちを生み出さないことが大事である。</li> <li>・ 教育の内容についても、何でもデジタルにすればよい、ICTがあればよいというものではなく、そういう時代だからこそ、やはり生身の体験というものがとても大事になる。</li> <li>・ 小学校の就学前に、考える力を付ける、自分で自発的に行動する力を付けるというのが大事なので、園・所等では今もそういったことに取り組み</li> </ul>

議 題	委員名	意 見
		<p>れていると思うが、保護者の中には習い事に熱心で、主体的な遊びから学ぶということに関心が低い方もおられるかもしれないので、更なる啓蒙を進めていただきたい。</p>
	内田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ マスクに対する考え方を捉え直してはどうか。特に低年齢のお子さんにとっては、笑筋のような表情をつくる筋肉の動きが見えないと感情が読み取れず、オキシトシンなどのホルモンの分泌が悪くなるというデータもあるので、口元が見えるような工夫をされてはどうか。</li> <li>・ 先生の笑顔の写真やお名前を書いたワッペンなどを胸元にぶら下げて、赤ちゃんや幼児初期のお子さんに付き合うような工夫もよいかもかもしれない。</li> <li>・ センターから、子供がしなければならぬ体験について、エビデンスに基づく形で、保護者に向けて発信してもらいたい。</li> <li>・ 乳幼児教育・保育に対して、県の各課が横断的に取り組んでほしいし、市町とも連携・協働してほしい。</li> <li>・ 園・所等の遊びを動画や写真などで記録し、子供の発話・保育者のことばかけなども保育記録（ドキュメンテーション）として、日々の保育を可視化し、それに基づき保育カンファレンスで環境設定や援助が子供の発達過程や状況に適切かどうか形成評価しながら、PDCAサイクルを循環させ保育の質を高めていただきたい。子供の生活する姿や発想を大切に適切な環境を構成し、子供が主体的に「アクティブ・ラーニング」⇔「脳働楽習」に熱中できるように「子供中心の保育・教育」に取り組んでいただきたいと願っている。</li> </ul>

議 題	委員名	意 見
	高月委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 環境を通しての教育・保育というものが大切だと思っており、特に新型コロナウイルス禍において、密にならない環境の中で、好きな遊びをどこまで充実させられるかという工夫が十分にできれば、ある程度、子供の発達の保証や密にならない保育というものができるとは思わないか。</li> <li>・ 園・所等における行事のあり方などが随分と変わっていく中で、そういった環境下での子供の心身の状況と育ちの見通しを踏まえたカリキュラムマネジメントのあり方が、非常に要求されるのではないかと。</li> <li>・ 休園中も幼稚園ではオンラインによる保護者相談などをされていたようで、先生と保護者の距離が近くなった部分もあるようだが、保護者同士のつながりが少なくなっているようである。やはりママ友同士の子育て支援というの大きな役割を担っていたと思うので、そのあり方が問われているのではないかと。</li> </ul>
	利島委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 距離の取り方という時に、子供の育ちを保証するためには、物理的な距離だけではなく心理的な距離についても考えていくことが必要ではないかと。</li> <li>・ 子供を迎える時や送り出す時といった保護者の生活リズムも変わっているし、あるいは、お母さんと会う時といった子供の生活リズムも恐らく変わっているため、一人ずつの子供の生活のリズムというものをもう少し考える必要があるのではないかと。</li> <li>・ 行政に対しては、縦割りではなく横割りであってほしい。</li> </ul>
	七木田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 海外では、紙媒体ではなく、ドキュメンタリーショーをビデオクリップで作るといったところもあり、非常に有効ではないかと思う。</li> </ul>

議 題	委員名	意 見
		<ul style="list-style-type: none"> <li>センターには、新型コロナウイルス禍における保育実践の場での工夫のあり方や、県内の取組事例をまとめて、園・所等に発信してもらいたい。</li> </ul>
	橋本委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>新型コロナウイルス禍の保育において、ウイルスの終息後も残るものは何なのか、残すものは何なのかを学び取ることも必要ではないか。</li> <li>新型コロナウイルス禍で出来なくなったことを補う活動や、新たな方法での取組も提案していく必要がある。</li> <li>新型コロナウイルス禍や大きな災害後の保育実践について、本当に良い実践や工夫を集約して残していくことも大事である。</li> </ul>
	日高委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>子供が毎日楽しく遊べるということが学びになり、育っていくのだからということを考えた時に、子供たちが毎日楽しいと感じているかどうかは、やはり家庭の様子からよく分かる。家庭をどんどん巻き込んで、一緒にやっていくことで見えてくるものがあるのではないか。</li> <li>三密ではあるが、今だからこそ、家庭では子供さんと肌で触れ合うスキンシップが必要ですよという情報を伝えていくことが必要ではないか。</li> <li>センターや県教育委員会だけでなく、県の中での横のつながりができて、市町の教育委員会や生涯教育の方々等関係者、ネウボラの保健師さんたち、保護者、祖父母、保育施設の先生たち、こういった方々がみんなつながり、顔が見える形になってつながっていくような仕組みづくり、基盤づくり、保護者同士のつながりづくりに今後も取り組んでいただきたい。</li> </ul>
無藤委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>キャスケード（滝）システムの導入。センターと園・所等を結ぶところに3段階程度の区切りを入れ、それぞれでの養成を図る。都道府県設置のセンターのメンバーが園・所等を直接に訪問するのは相互的信頼関係を作</li> </ul>	

議 題	委員名	意 見
		<p>るのに大事だが、それだけだと数量的にいずれ限界に達する。そこで、センターとそのメンバー、アドバイザー（都道府県全体で毎年 10 名から数十名育成できるとよい）、さらにリーダー（数園に 1 名程度で研修の世話役を務める）といった段階で広げていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ICTを使った研修を広げる。今の時期を越えて、これは続くし、むしろ講義に類したものはICTで行い、少人数による議論を集合的に行うというやり方が定着するのではないか。また、ICTのどのようなやり方がよいかは現場でのハードなどの普及によっても変わるので、その試行をいろいろなやり方で行う必要がある。</li> <li>• ネットで保育者への専門的な情報を提供する。センターで作ったものや公的な文書情報を掲載するのみならず、有益で信頼できるものならそのURLを載せるとか、各地のセンター・自治体・民間機関などの資料を紹介する。さらに実践事例を多数載せるように、園・所等から募り、多様な保育のあり方を示す（個人情報の配慮の上で）。その際、写真や短い動画を中心にするとよいだろう。</li> <li>• 自治体の他の部署でもよいのだが、各種団体や園・所等で行う研修について、キャリアアップ研修などの単位に充当するような条件を明示し、その認証を行うようにする。それより、民間や保育現場での自主的な研修の努力を公的なものとしていく。</li> </ul>